

第一部

・総評

出題形式は例年通りだが、問題内容は確実に簡単になった。また演繹的推論に基づく、答えが明瞭に定まる問題が、去年に引き続き今年も若干増えた。演繹的推論に基づく問題は概して時間がかかりがちだが、今回は確かに時間のかかる出題も多少あるものの、そこまで情報処理のきつい問題は見当たらない。この点も手伝って、問題内容は平均点を押し上げると考えられる。満点は増えるであろう。ただし適性試験の受験者数も変化しており、最終的な平均点は異なる変化をする可能性もある。ちなみに去年は第二部が急激に易化しており、演繹的な問題に比重を移すのもここ二三年に一貫した傾向であり、総じてここ数年の傾向がそのまま踏襲されている。

・出題形式

例年通りの五肢択一で問題数は去年より1問増え、一昨年（2008年）と同様の24問。（ちなみに2004～2007年と2009年は23問）例年通りである。

問題の内容に踏み込んで見てみると、対話の論点や共通認識を問う問題は、去年・一昨年と各3問ずつ出題され重んじられている印象が強かったが、今年は完全に姿を消したのが目立つ。逆に命題の問題は、一昨年に姿が見えなかったのが去年3問出題と復活し、今年はそれを踏襲して更に1問を加え、4問出題となった。ただし、例年と比べて要求される知識は、より基本的な物になっている。

命題は演繹的な（数学のように、答えがはっきり定まる）問題の典型であり、他方対話の問題は演繹的なアプローチが通用しない問題の代表格であり、結果的に演繹的、さらに言えば算数、数学的な色彩がさらに強まった。演繹的・数学的な色彩を強めるのはここ3年ほどDNC、JLFに共通してみられる傾向であり、正確で素早い情報処理が要求される傾向が続くであろう。命題の知識は、もちろん必須である。

目新しい問題としては問題5が挙げられる。条件間の優先順序を推測させる問題は過去にも類例の多い頻出問題であったが、本問はそれで優先順序の結論が出ない部分を特定させ、その部分の順序を決定する肢を選ばせるという内容で、冷静に分析すれば出来ない問題ではなかったが、どうアプローチしたら良いのか分析する手間がかかり、時間的にも、正解できるかどうかの点でも、今回の出題の中では、やや難しい問題であった。

・問題難易度

あらゆるパターンで難しい問題が影を潜め、問題の難易度低下は明らかである。時間がかかる問題も減った。第5問で予想外に時間を使ってしまいパニックに陥ったりすると点が崩れただろうが、第1部は例年、難易度もかかる時間もごちゃまぜの出題がなされており、はじめのうちに難問が出て、それは飛ばして読んでいく程度の知恵は働いて当然。これから受験する方は、よく意識しておいていただきたい。

第二部

・総評

昨年に引き続き、難易度は平年と比べかなり簡単だった。昨年の第1問が極端に簡単だった（昨年の講評では「もはやパズルではない」と述べさせていただいた）のとは比べると、第1問は曲がりなりにもパズルと呼び得る、推論を要する問題に戻ったので、その点は昨年より難化であるが、昨年の易化は第1問に留まらず、第2～4問にも及んでいた。その第2～4問の難易度は昨年並みで、従ってそれ以前と比べると大幅に易化したままとと言える。あるいは、昨年は第3問が完全に数学の問題の様相を呈していたのと比べ、今年はオーソドックスなパターンのパズルばかりで、解きづらい問題も無かった。予備校でパターンを一通り見ていれば、特に驚かずに淡々と解きこなせただろう。その点は却って昨年よりも易化したと言える。

総じて、昨年よりわずかに難しいに留まり、大きく難化はしていないし、ましてや一昨年以前の難度は見る影も無い。

・出題形式

大問4題構成は変わらず、小問数もほぼ同じだが、ここ2年は各大問とも小問数は6問ずつで計24問で統一されていたのが、大問3だけ小問7つとなった。とはいえ大きな変化とは言えず、まず例年通りといって良い。図が与えられていない点も、ここ数年を踏襲している。

問題の内容については、一昨年以前の日弁連第二部は難易度が進むにつれて高くなり、最後には相当難度の高い問題も出題されていたのだが、今年は去年に引き続き問題は簡単であり、また去年までは維持されていた問題ごとの難易差も不明瞭になった。

また、他のパズル系の問題を出題する試験でもよく見かける、ありがちな出題パターンが多かった。スケジュールやウソつきゲームなどは解法も定まっており、戸惑う要素はなかったであろう。

・問題難易度

出題形式がありがちなものであった事は既にコメントしたが、そのありがちな問題タイプの中でも、特別難易度が高いわけではなく、高度なテクニックを駆使するようなシーンも無い、正直なところつまらない出題だった。選択肢も切り方さえ見えてしまえば簡単に切れる甘めの選択肢が多かった。ただ登場する人物の数が多い問題が多かったことと、大問2のスケジュールが情報が少なく、対称性の高い問題だった事から、パズルが苦手な方は実際の難易度以上に苦戦させられた部分もあったかもしれない。

総じて問題難易度は去年より若干上がった程度で、比較的簡単。ただし第1部でもコメン

トしたが、受験者数の変化が著しいため、平均点は出てみなければ分からない。今後の難易度は、このレベルで落ち着くのかもしれない。

第三部

1. 全体的な傾向

日弁連の適性第3部は、難易度がよく調整されており、文章選択・問題の作り方、ともに余裕が感じられた。

出題傾向に大きな変化はないが、全体的に解きやすい問題が並び、基礎的な読解力を測る問題がベースとなっている。注意を要するのは、問題2(4)と問題3(4)のみである。ただ、「似たものの区別」をしたり(問題1, 4)、細かい事実が並べられていたり(問題2, 3)と、読みとりに神経を使うところがあるため、もたもたせずに読めたかどうかの問題である。

問題形式は例年通りで、難易度も全体としては変わらない。文章も大人向けの題材が選ばれており、スピノザのエチカについての出題も、日弁連らしい視座である。しかし、問題1の「ストレス」に関する文章は、概念について「整理」するだけの内容にとどまっており、問題を掘り下げて論じたものとなっていないところが従来とは異なっている。

ポイントとなったのは、問題4に抽象度の高い文章が置かれたことである。時間に押されて落ちていて読めなかった受験生も多かったであろう。しかし、文章では何度も同様のことが繰り返され、設問も基礎的なスキルで解けるものばかりであった。気持ちに余裕さえあれば、6問とも取れる問題である。ここで「基礎力」を発揮できたかどうかによって、受験生の得点が大きく変わったと思われる。

2. 問題概要

問題1 (美馬達哉『〈病〉のスペクタクル』)

「ストレスの心理学化」を取り上げた文章。ストレスという概念の使われ方を整理しており、問題をじっくり論じた部分ではないが、著者の視点が「ストレスという概念のあいまいさ(両義性)」に置かれている点をしっかりと捉えることが大切である。小問はおおむね〈部屋分け〉問題(対比の図式を捉える問題)となっているが、実は〈部屋分け〉ができないというところに本質的な問題があるのであり、出題者の狙いもここにある。

また用語法を歴史的にたどっており、時間軸にそった整理が必要となる。(3)、(4)をしっかりと正解することがポイントとなる。(6)の「著者の考え」についての問いは、読みとりの上では重要だが、誤肢も消去しやすく、得点しやすい問題となっている。

問題2 (檜山義夫『釣りの科学』)

札をつけたハゼを放し、釣獲率を調べる話である。統計に関しては、第1回(2003年)に4問目に社会調査についての出題があったが、あの問題と比べると本問はずっと易しい。

ごく基本的な読みとり問題となっており、要点をつかめば時間もかからない。ただし、このような話題に苦手意識を持つ人も多いはずである。

(1)と(6)では消去法を用いるが、(2)と(3)は、本文の記述と重ね合わせればよい。(5)の整序問題もさっとグルーピングして解ける。

(4)の「たとえの内容」という設問には、戸惑う人も多かったであろう。「天狗や尾ヒレのついた話」の内容として「適切でない」ものを選ばせる問題で、直前に「水界や魚についての知識」とあるので、これにあてはまらない「釣り道具と腕前」(肢1)を選べばよい。

問題3 (岡村秀典『夏王朝』)

中国古代の夏王朝の成立について述べた文章。次の殷王朝との異同を捉える必要があり、前半は飛ばし読みをして、上手く時間を使いたい。

「このように…」と始まる第13段落のまとめを先に読めば、(1)～(3)が片づけられる。(2)は点差の開く問題となっているが、空欄の前後の内容からも消去法で正解肢を選べるようになっており、落としたくない問題である。

(4)は、「殷周時代に継承されなかったもの」であるが、夏王朝でも「禹の伝説のような大規模な治水事業はなかった」という記述に着眼して解きたい。

(5)は、日弁連独特の設問で、狙いを考えさせるものとなっているが、厄介な問題ではない。「夏王朝と比較した殷王朝の特徴を説明したものとして、適切でないもの」とは、つまり、夏王朝と「同じもの」を選べばよいのである。(6)の「組合せ」を選ぶ問題も易しい。

問題4 (上野修『スピノザの世界』)

西洋哲学からの出題だが、センスは要らない。図式整理をして、打ち出しを捉えれば、全問正解できる。「衝動」「欲望」「目的」の3項関係を整理する必要があるが、「衝動は意識できない」が「欲望は意識を伴っている」という相違点をしっかりと押さえれば大方の問題は片づけられる。ほか、(3)と(6)もごく基本的な読みとり問題である。

このような抽象的な内容の文章が出題されたときには、試験用の「客観読み」をしなければ間に合わない。頭の中で内容を理解しながら読み進むのではなく、はじめから図式をつかみにかかることが大切である。